

寓話としての『天使の群れ』

香ノ木 隆 臣

小説、詩、劇作、伝記、そして批評のそれぞれの分野で卓越した業績をのこしたロバート・ペン・ウォーレン（Robert Penn Warren, 1905-89）の第5作目の長篇小説である『天使の群れ』（*Band of Angels*, 1955）は、見た目には混血とわからない少女を語り手に起用し、彼女が自身の成長の軌跡を後年になって回想するという物語である。その過程には、南北戦争というアメリカ史の大大水嶺が密接に絡んでいる。鋭敏な歴史意識を持つウォーレンは、その最初の長篇『ナイト・ライダー』（1939）以来、好んで史実を小説の背景にとりあげている。『天使の群れ』は、それまでの諸長篇の下敷となった史実とは比べることができないほど大きな題材が選ばれているわけであるが、作者の目的は歴史小説を書くことではなく、従来の小説群と同様に、「アメリカ史における理想と現実の緊張関係」⁽¹⁾にうかがわれる、現代にも通用する意義を探り出すことが最重要の課題となっている。小論では、この小説の史実がどのように登場人物の行動と結びつき、またそこからいかなる作者ウォーレンのメッセージを読み取ることができるのかを考察してみたい。

南北戦争は1865年に南部連合側の敗北で終結したが、むしろこのことで逆に南部の意識は固く結晶した。『南北戦争の遺産』（1961）でのウォーレンの表現を借りれば、「リーがグラントに剣を手渡したまさにその瞬間、南部連合は誕生した」⁽²⁾のである。元来は農業経済を中心としてきた南部は、戦後に北部の産業資本による急速な工業化にさらされ、この異常なまでの歴史の激流に押し流されて消滅した、大農園での優雅な生活、「従順」な黒人奴隷、「サザン・ベル」といった、旧南部的なイメージへの強烈なノスタルジアが形成されたの

である。こうした「旧南部の神話」とでもいうべき幻想に支えられて、北部インダストリアルイズムに対抗する姿勢を打ち出した12名の南部知識人による『わが立場』(1930)が書かれた。この論集に所収のエッセイ「黒いちごの繁み」で、ウォーレンは南部における黒人の不当な抑圧の事実を指摘しながら、「ジェファソンのな自営農民の牧歌的ユートピア」⁽³⁾への回帰について語っていた。『わが立場』全般に見られる、農本主義に立脚したユートピアとしての旧南部のイメージは、ルイス・D・ルービンによれば、「人間が静穏に調和して存在する」⁽⁴⁾理想社会のそれであった。

さらに、『天使の群れ』の上梓の1年前の1954年には、公立学校における人種分離教育を違憲とする判決が最高裁判所によって下された。この司法判断が南部白人社会に与えた衝撃は、南部の白人の約8割が判決に反対したことからも容易に推測できる⁽⁵⁾。つまり、彼らは旧南部的な価値観に固執していた、言い換えれば、歴史の変貌を受け容れるのを頑として拒み続けた、とも考えられる。混血の女性が『天使の群れ』の中心人物とされていることは、そうした現実の出来事とは無関係ではない。では、『天使の群れ』に描かれている南北戦争前後の南部の実態はいかなるものであるのか。そうした状況下に生きた人物から読みとれる意味を解明してゆくことにする。

女主人公アマンサ・スターは、「ああ、私とは誰なのだろう？」⁽⁶⁾と語りはじめることによって物語の幕を開ける。この問いは、「もし自由にさえなれたなら」⁽³⁾という一文とともに、『天使の群れ』の追求する自己探求のテーマを集約したものとなっている。アマンサを産んだ直後に母は世を去り、彼女は数多くの黒人奴隷を所有している農園主である父親アーロンと、乳母とに育てられる。アマンサは9歳まで、生まれたケンタッキー州で過ごす。彼女が当時を回想するとき、「草におおわれ、陽の光のあたるところで、水が流れてきらきらしていたり、ただ静かで明るいただけだったりして、私自身がそこに座っている」⁽³⁾という風景を思い描き、また、彼女の家の周囲の木立の「上のほうの葉っぱが、そよ風というほどではないけれど頬に爽やかなくらいの少し涼しい風の訪れに揺れて、木々のしたの刈り取られた草のうえに青く暗い影を落とし

ていた」(5)とも述べている。彼女の語るこうした風景描写から、「アメリカは清く汚れなき共和国であり、森と村と農家からなり、幸福の追求に専念できるような静かな国であるというイメージ」⁽⁷⁾を連想してもいいだろう。

だが、アマンサはこのような一種の楽園的世界に浸りきっていたわけではなかった。彼女が戸外で遊ぶ草原には、ひとつだけ墓がたてられ、それはただ「Renie 1820-1844」とだけ刻まれた彼女の母の墓であった。「renié」とは「否認された」という意味のフランス語であり、アマンサの母は見棄てられた名もなき女性ということがほのめかされている⁽⁸⁾。さらに、アマンサのかわいがっていた人形は、以前は母の持ち物だったときかされる。それを父に話すと、彼は異常なまでの反応をみせ、二度とその人形がアマンサの目に触れないようにしてしまう。この人形に象徴されるように、アマンサのこれからの人生は、「もっと巨大な力の気まぐれが命令を下すように、守られ愛されるべき、あるいはぞんざいに打ち砕かれてしまう」⁽⁹⁾類いの脆弱なものにほかならないのである。

中心人物としてのアマンサの性格は、ウォーレン自身がインタビューの折に「語り手の経験の豊かさと深みが充分ではない」⁽¹⁰⁾とはっきり認めているものの、あくまでもこのコメントはアマンサの経験だけに的を絞ってなされていることを、ここで強調しておきたい。たしかに、ストーリーの展開だけをたどれば、『天使の群れ』をメロドラマとして片付けてしまうのは容易である。しかし、「歴史はたとえ平素はそう読めるとしても、メロドラマではない」⁽¹¹⁾と断じた、『南北戦争の遺産』におけるウォーレンの発言をこの小説の解釈にあてはめたい。アマンサはこの先、幾人かの周囲の人物の昔話や経験を見聞し、そこから何らかの意味を学んでゆくことになる。この認識のパターンは、『天使の群れ』以前に出版された長篇『天国の門で』(1943)や『すべて王の臣』(1946)の物語形式の「アメリカのビルドゥングスロマン」⁽¹²⁾に固有のものであり、『天使の群れ』をウォーレン文学のテーマの系譜のなかに組み入れて考えることを可能にしているのである。アマンサの半生という個人の歴史と、南北戦争という公的な歴史とは、どのように関連しているのだろうか。

アマンサは9歳半ばの夏に、オバーリン・カレッジへの入学準備のために親元を離れてシンシナティへ連れてこられる（オバーリン・カレッジはアメリカ最初の男女共学の大学として知られ、また、オバーリンは南北戦争前は奴隷制廃止運動の中心地となった町でもあった）。そこで彼女はセスという、神学専攻の学生と淡い恋を経験する。そうした日々も束の間、アマンサは彼から父の死亡記事を見せられ、同時に世話になっているミス・アイデルという女性と父は不倫関係にあったことを告げられたのだ。半信半疑で急いで故郷に戻ったアマンサは、母が実は父の黒人奴隷であったことを知る。自らの「黒い血」ゆえに白人としての人格を否定されたアマンサは、父の負債の抵当としてニュー・オーリンズの奴隷市場へ送られてしまうのである。これは、無垢な樂園の世界からの追放と受けとることができる。だが、「私はアイデンティティのない真空状態に、待ち構えている痛みをいくらかおぼえている麻痺状態につるされたのだ」（62）と述懐する彼女の台詞に、小説の冒頭の第一文を重ねてみれば、白人と黒人との間で分裂して混乱した彼女のアイデンティティが明確になり、自己探求の主題が前面に押し出されていることがわかる。「自由にさえなれたら」（3）とも語っていた彼女であったが、その願いをかなえるまでには、少なからざる荒々しい現実の諸相に立ち会わなければならなかった。

奴隷市場でアマンサを2000ドルの高値で落札した、ハミッシュ・ボンドという中年の農園主の許で彼女は暮らし始める。一風変わったこの男は、彼女を奴隷として扱わず、別の奴隷に面倒を見させ、特に仕事を与えることもない。ハミッシュのそうした態度は「病のような優しさ」（110）と呼ばれ、アマンサは奇妙な「真空状態」のなかで苦悩せざるを得ない。対峙するのは自己そのもののなのである。

一方、過去や未来、喜びや悲しみ、外の世界のあらゆる物事がどんどんなくなってゆくにつれて、私は、自分の肉体の本質、暗黒のなかで流れている血、おそるべき規則正しきで収縮する心臓に気がついたのだ。……それはまるで、自分自身が、明るい陽差しのなかで、その内側へと落ち込み流れてゆき、眠るときや死ぬときのように果てしなく落ちてゆく暗くて心地よい穴のようだった。しかし、その落ち、流

れ、死ぬような感覚を止めようとは思わなかった。(92-93)

ただ自己の内面だけをのぞきこんでも、これまで樂園のような世界でしか生きてこなかった彼女には、意味のある過去は何ひとつなかったことが示されている。

一度は北部への脱出を試みたアマンサは、ハミッシュから息子のような待遇を受けている黒人、ラウルーに見つかって断念する。それを知ったハミッシュは彼女を解放することを決め、アマンサを伴って船で北部に向かう。しかし彼女はその途中の港で彼との別れ際に、自分でも理由が解らないままタラップを走り下りて、結局はハミッシュの許にとどまることとなったのである。ハミッシュとの安逸な生活を選択したアマンサの、あたかも宙吊りのような人生については、次のような諦念の混じった説明がなされている。

あなたは時間のなかを生きる。その時間の小さなかけらはあなた自身の人生である。しかしそれは、あなたの人生と同時に進行しているほかの人生すべての集約でもあるのだ。言い換えれば、それが「歴史」なのであり、あなたという存在は「歴史」が表されたもので、あなたは自分の人生を生きるのではなく、どういうわけか、人生の方があなたを生きるのである。だから、あなたは、ただ単に「歴史」が個人に対して作用する対象に過ぎない。(134)

歴史の圧倒的な力に対するペシミスティックな認識は、ウォーレンの代表作『すべて王の臣』の語り手ジャック・バーデンが一旦はたどりついた、「あらゆる人生は血の暗黒のうねりと神経の痙攣にすぎない」とする、「大いなる痙攣」⁽¹³⁾という冷笑の人生哲学の変奏として解釈できる。これまでの人生の意味や、何が自分の人生を支配してきたのかを吟味してはじめて自由になれる、とアマンサは言うが、そのために彼女はさらに歴史に翻弄されるのである。ここから、南北戦争が史実として大きく外側から物語を規定し、歴史のなかの個人、アメリカ史の理想と現実が織り成すアイロニーといった要素が描かれてゆき、アマンサの「教育」となるドラマが展開するのである。

ミシシッピ河上流にあるハミッシュの農場に設けられている簡易病院で働いていたアマンサは、1861年4月の南北戦争の勃発と同時にハミッシュと共にニュー・オーリンズへと戻る。翌年の連邦軍の攻撃にさらされた町は混乱するが、それは彼女の新たな遍歴の契機ともなった。どこか謎めいた男ハミッシュは、かつてアフリカでの奴隷買いつけ商人であった過去を彼女に告白する。彼の本名はアレック・ヒンクスといい、ハミッシュ・ボンドとは、家出をした後にアレックが奴隷運搬船の水夫として働いていた船の船長の名だった。アレックはその船を盗み、後に船長の名を騙り、残虐のかぎり尽くして奴隷商人として成功を収めた。そして、アフリカのとある村を襲った際、殺されかけた赤ん坊を助け、ラウ＝ルーと名づけて自分の息子のように育てたのだった。

ハミッシュの語りは、ウォーレンの作品に頻出する「物語内の物語」の形式をとっている。ここから明らかになるのは、一見すると温和な人物にみえるハミッシュに潜んでいた、「奴隷狩り」という過去が存在である。それに対しての贖罪意識ゆえの、黒人奴隷への「病のような優しさ」であったことにアマンサは気づく。さらに注意しておきたいのは、ハミッシュは無能な父と抑圧的な母とを拒否して家出をし、加えて名前を自分でつけかえている点である。母と叔父の選んだ銀行員の職に就くことを拒否し、彼は家出をして船乗りになっている。また、名前がアイデンティティを表すことはいうまでもないが、ハミッシュの名を騙ることで、自らの過去を否定して偽りのアイデンティティをハミッシュは背負うことになったのだ。こうした過去の話聞かされたアマンサは、「私はハミッシュの手にしっかりとすがりついて、彼が話していることを考えないようにした。もし考え過ぎたら、それが誰の手かがわからなくなり、もしその手を離したら自分が何かの縁からすべり落ちていきそうに思えた」(189)と語っている。

ハミッシュを代理の父として、無垢な状態を保とうとする彼女だが、ウォーレンはそれを許さない。ハミッシュから正式解放されたアマンサであるが、ハミッシュに依存した生活を続けられなくなることに対する、無意識の恐怖をおぼえている。「自由!」と叫ぶ彼女は、「何か得体の知れない、深い苦悩」

(202) が湧き上がってくるのを感じているからである。ここで、南北戦争の勃発に触発されたアマンサの解放が、かつて父の死があらゆる危険の排除された少女期からの訣別の契機となっていた挿話と平行しているとわかるだろう。ハミッシュという代理的父親の庇護の許で生きることには責任が伴わず、「真空状態」を楽しんでいればいいのだから。一度は解放されかかりながら、再び船のトラップを駆け下りてハミッシュの許に戻ったエピソードに、その心情が暗示されていた。

アマンサは切望していた自由を手にしたにもかかわらず、「夢のなかのような超然とした気持ちで、その感情はわたしのまわりで展開していた怒り狂った興奮の日々でさえも、世の中の出来事をガラスを通して見たもののようを感じさせた」(205) としか思えなかった。1859年のジョン・ブラウンのハーパーズ・フェリー襲撃事件が盛んに報道されても、「突然、この世界でこれまでに起きたことすべてがあらゆる歴史は、単なる残忍な喜劇にしかみえなくなった」(209) と感想をもらすだけである。ジョン・ブラウンが急進的奴隷解放論者であったことは正反対に、彼女のハミッシュへの隷属、すなわち少女期への固執の欲求の激しさがうかがわれる。だが、その衝動は歴史感覚の喪失を招き、ついには自己探求を阻害することになると解釈できるのである。

南北戦争という歴史の現実が、自由になったアマンサの人生に否応無しに影響を及ぼすことがわかるのは、かつての恋人のセスとその友人トバイアスとの出会いのエピソードである。北軍がニュー・オーリンズを占拠した1862年春に、北軍兵士として駐留していたセスとトバイアスのふたりに偶然に出会ったアマンサは、トバイアスが彼女の巻き込まれたトラブルを解決したことで、彼に急速にひかれ、セスがその仲をとりもって結婚するに至る。その直前にハミッシュがアマンサを訪れ結婚を申し込むが、彼女は断る。別れ際に彼が言い残す、「おぼえておいてくれ」という言葉を聞かされた彼女は、「彼〔トバイアス〕の清らかさと自由が私を自由にしてくれた。世界のあらゆるもの、あらゆる過去、私の古い自己から解き放ち、新しい自分をつくるために自由にしてくれたのだ」(234) と考える。しかしこれは、ハミッシュの過去の体験のみなら

ず、アマンサ自身の「黒い血」の象徴する過去を無視した誤った認識であることは、ほどなく明らかにされる。

トバイアスはマサチューセッツ州出身のハーバード大学の卒業生である。南部と北部という対立の構図もさることながら、父親がエマソンの旧友という設定が読者の目をひく。トバイアスも父親譲りのエマソン信奉者として描かれている。「もし仮に歴史が『大いなる靈魂』の企図の作用だとしても、問題事の救済はいつも完璧とは限らない」から「不完全な人間は理念を完成させなければならない」(238)と熱っぽく語るトバイアスが、抽象的な理想主義に生きる人間であるのは明らかである。しかし、「あらゆる社会問題が美徳への抽象的な傾倒によって解決されるというわけではない」⁽¹⁴⁾と別の機会に言明しているように、ウォーレンは理念によるユートピア建設の夢には強い懷疑を表明する。トバイアスは後に金メッキ時代の現実に絶望してアルコールに溺れるシニカルな人間に墮落してしまうが、ここでウォーレンはエマソンを蛇蝎のごとく忌み嫌った、と指摘するジェイムズ・H・ジャスタスの評言を思い出しておきたい⁽¹⁵⁾。

「変貌」はもうひとりの理想主義者セス・パートンも経験する。かつてオバーリン・カレッジで敬虔な神学生だった彼は典型的な修道僧で、説教で聴衆を大いに感動させていたが、戦後は穀物相場に投機して大成功を収めた。アマンサがセスの死亡記事を目にしたときには「向こう見ず相場師パートン」という皮肉な見出しがつけられ、その遺産でセスの名を冠した神学校を創設する計画が報じられた。また、かつて少女の頃カレッジに通っていたときに世話をしてくれた、一種の代理の母親ミス・アイデルの「変貌」も滑稽なまでにグロテスクに描写されている。かつてアマンサは、「彼女ほど美しい存在はなにひとつない」(22)とミス・アイデルを崇めたが、今やミス・アイデルは「途方もなく太ってしまい」「裸の腕はハムのように」「白く太った手のなかに短い指が埋もれてしまっていた」(351)と、執拗にその不気味さが強調されている。さらに、彼女がかつてセスと不倫関係にあったことも暴かれ、アイデルという名が偶像(アイドル)や理想(アイディアル)という言葉を連想させるように、

尊敬に値する、美德をたたえた「共和国の母」⁽¹⁶⁾の典型とみえながらも、彼女はその神話の虚妄性を暴く存在である。トバイアス、セス、ミス・アイデルたちが、時間により「変貌」した事実は、美德に満ちた、時の流れない楽園として共和国アメリカが建設されたことを考慮に入れば、アメリカ史のアイロニーを雄弁に物語る比喻となっている。

エマソンの理想主義者トバイアスは、戦後は解放奴隷局で積極的な活動が始める。しかし、彼は妻アマンサから「黒い血」の秘密を明かされると、激しく動揺してしまう。ふと見たトバイアスの指の爪が、内的葛藤を表すように肉から出血するほど深く噛まれていたのを見て、アマンサはそれを自分に対する「裏切りと嘘偽のしるし」(296)だと解釈し、口論の末に家をとびだしてラウ＝ルーの許に行く。理想主義者の白人に潜む偽善が暴かれる一方、黒人のそれも同じ扱いがなされている点にも目を向けたい。ラウ＝ルーもまた、「自分自身の理想に裏切られた理想主義者」⁽¹⁷⁾という人物像に属している。彼は南北戦争にオリヴァー・クロムウェル・ジョーンズという名で参加し、武勲をあげる。この名はもちろん、イギリスのピューリタン革命の指導者の名からとられている。ラウ＝ルーは戦争後に黒人解放運動の指揮を執り、黒人の選挙権獲得を目指して急進的な活動を展開する。さらに、その活動をめぐる内紛で、父に等しい存在のハミッシュをリンチにかけてしまう。ハミッシュは首に縄をかけられて荷馬車にのせられ、飛び降りて自死ともいえる最期を遂げる。こうしてラウ＝ルーは、ハミッシュを殺害することで自らの過去を否定する者となるのである。

黒人暴動煽動の罪でラウ＝ルーは逮捕されたため、アマンサは再びトバイアスの許に戻り、ニュー・オーリンズを離れてカンザスへ移住する。トバイアスは既に自分の理想主義が金メッキ時代の腐敗した現実の前に敗れ去ったことを認め、アルコールに頼るようになってしまった。「私たちは西部で失敗した。私たちは年齢を重ねてゆきつつあるのだ」(353)と考えるようになった1888年の春ごろ、アマンサは老いさらばえたラウ＝ルーが街路にうずくまっているのを見かける。驚愕した彼女はラウ＝ルーの求めるまま金を与えるが、結局こ

の事件は、彼女が忘れていた自らの過去、つまり「黒い血」を思い起こさせる強烈な認識をもたらす役割を果たしたのであった。今まで、ただ過去から逃げてきたアマンサにとって、ハミッシュ、トバイアス、ラウ＝ルーといった人物は「天使」としての存在であった⁽¹⁸⁾。しかし、アマンサは彼らに頼って自らの「黒い血」、いうなれば自己にまつわる歴史から目を逸らし続けてきたからこそ、「一体私とは誰なのだろう？」という根源的な問いに答えられなかったのである。アマンサに潜む「黒い血」とは、個人は過去から切り離された存在ではなく、脈々と続く歴史的存在であることを表す一種の比喩であり、自由になることとは、自分からの逃避ではなく、歴史のなかに生きる責任を自覚することを指しているのである。

アマンサにそうした認識を与える使命を果たしたかのようにラウ＝ルーが世を去った後、彼の墓へ出掛けた彼女は、「黒人で名も無き老人」とだけ記された杭を見つける。物語の始まりで母の墓に行ったエピソードに呼応するこのシーンで、彼女は「これまで誰もわたしを自由にしてくれなかった」(362)ことに思い至る。そして、「自分自身以外には」(364)誰も自分を自由にできないという今まで忌避してきた考えが、はっきりと立ち表れてくるのである。

「自分しかいない、自分しか」この考えは、私は生きなければならず、幼いマンティ……ではないと自覚せねばならないことだった。マンティは苦しみぬき、様々な事件が起き、全世界があらゆる愛にみちた不公平さで降りかかってきた。ああ、そうではない。私に意志があるとおわせながら、私は世界の原因そのものにかかわり、あらゆる出来事は私のなかにあるものと不思議に調和し、自分でそれを引き起こさなくてもなぜか私の意志と一致し、どういうわけか自分がそれを引き起こしたことになる。そして、私がいなければ何事もいまのように起きなかったことだろう……そんなことをほのめかす考えだった。(364)

以前にアマンサが語っていた、個人は歴史の作用を受けるだけの存在というペシミズムは全くみられず、逆に彼女は、存在の連鎖の感覚を他者とかかわるうちに悟ったのである。「真空状態」にあった自己を捨てたアマンサは、数知れ

ぬほど多くの人々が、「黒人も白人も、向こうに広がる草原で、ひどくぼんやりしてはっきりと顔はわからないが、私を見ながら手を差し伸べている」(363)という幻想的な心象風景を思い描く。つまり、アイデンティティとは、歴史のなかで展開した他者の繰り広げた様々なドラマが、実は自己の運命でもあると認識することでのみ得られるものであったのである。

少なからぬ数の人間の死や理想の崩壊を体験してきたアマンサが、歴史のなかに存在する主体的な自己の姿を認識するに至る成長の軌跡から、「悲しみが人間の経験の中心を占めることを認めない限り、アメリカ人は不毛な疎外状態におかれる運命にある」⁽¹⁹⁾というホーソンの警句をウォーレンが現代において再び発している、というデヴィッド・W・ノーブルの評言が思い出される。「お父さんはわたしを愛していたのだ」(373)という独白にみられるように、彼女は憎しみの対象であった父との内なる和解を果たす。「いつ私は死んで、父の犯した過ちから自由になれるのか」という A. E. ハウスマンの詩から引用されたエピグラフに暗示されていた父なるものへの憎悪は、ようやく氷解したのである⁽²⁰⁾。ここにおける「父」とは単なる父親ではなく、ジェイムズ・H・ジャスタスが指摘するように、「『過去』や『歴史』として一般化」⁽²¹⁾できる存在にほかならず、歴史の現実を肯定するアマンサの姿をうかがうことができる。『天使の群れ』は、個人は他者や歴史との相互作用の上に成り立っている有機的存在であることを感得したアマンサをめぐる、自己探求の寓話であったのである。

註

- (1) Lewis P. Simpson, *The Fable of the Southern Writer* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1994) 132.
- (2) Robert Penn Warren, *The Legacy of the Civil War: Meditations on the Centennial* (New York: Random House, 1961) 15.
- (3) 大橋健三郎「南部文学のジレンマ——『アグレーリアン』運動から『南部文芸復興』へ」、『アメリカの南部』井出義光他編（研究社出版、1973）234.
- (4) Louis D. Rubin, Jr, introduction, *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*, by Twelve Southerners (1930; Baton Rouge: Louisiana State UP, 1977)

xxxi.

- (5) 猿谷 要「南部と黒人革命」．『アメリカの南部』144.
- (6) Robert Penn Warren, *Band of Angels* (1955; Baton Rouge: Louisiana State UP, 1994) 3. 以下この作品からの引用は、本文中に括弧を用いてページ数のみを示す。
- (7) Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (New York: Oxford UP, 1964) 6. 引用は榎原胖夫、明石紀雄訳による。
- (8) Randolph Paul Runyon, *The Taciturn Text: The Fiction of Robert Penn Warren* (Columbus: Ohio State UP, 1990) 132.
- (9) John M. Bradbury, *The Fugitives: A Critical Account* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1958) 224–25.
- (10) Floyd C. Watkins, et. al., eds. *Talking with Robert Penn Warren* (Athens: U of Georgia P, 1990) 162.
- (11) Warren, *Legacy* 50.
- (12) C. Hugh Holman, *The Immoderate Past: The Southern Writer and History* (Athens: U of Georgia P, 1977) 61.
- (13) Robert Penn Warren, *All the King's Men* (1946; New York: The Modern Library, 1953) 360.
- (14) Warren, *Legacy* 31.
- (15) James H. Justus, *The Achievement of Robert Penn Warren* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1981) 22.
- (16) Kerber, Linda K. *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America* (New York: W. W. Norton, 1986).
- (17) Watkins et. al. 263.
- (18) *Band of Angels* というタイトルは、“Swing Low, Sweet Chariot” という黒人霊歌からとられている。Joseph Blotner, *Robert Penn Warren: A Biography* (New York: Random House, 1977) 299 を参照のこと。
- (19) David W. Noble, *The Eternal Adam and the New World Garden: The Central Myth in the American Novel Since 1830* (New York: George Braziller, 1968) 186.
- (20) このエピグラフは、A. E. Housman の叙情詩“A Shropshire Lad”の第28番，“The Welsh Marches”からとられている。Justus 246 を参照のこと。なお、1955年の *Band of Angels* の初版（Random House 版）にはこのエピグラフは付されていない。
- (21) Justus 246.